



元衆議院議員（千葉県地方自治研究センター顧問） **若井 康彦**

最近、登山にはまっている。今夏は薬師岳から雲ノ平、新穂高温泉まで約50kmを三日間、ひとりで歩き通すことができた。山歩きは健康増進に加えて全国各地をめぐることもできる。趣味と実益の一挙両得、ひとの迷惑にもならない。それよりは心身共にリフレッシュして、さらに、高くて遠いところで、いくらかでも見通しがきくようになればいい。

インバウンドと言え、山の上の国際化も例外ではない。夏の夜明けの富士山頂は老若男女で鈴なりだが、日の出の際の歓声は多彩だった。過半が他国語に聞こえたが、明るくなると果たして国際化はその通りだった。

傍の、いで立ち決めている青年に言葉をかけると、思いがけず言葉が通じない。顔は同じだが、聞けば香港政府関係の職員だった。拙い英語でしばし山頂の絶景を賞賛し、感動を共にした。その彼が、私のためらいに気づいてか、向こうから香港の今について語り始めた。詳しくは書かないが結論から言えば、事態は報道ほどには深刻ではないということにつきる。

だが、香港の一連の動き、やはり気になる。連日の報道シーンにいつもある種のショックを受ける。ひとつはそれがまさにかつて身近にみたことのある景色だからである。市街地を埋め尽くし、叫び、訴え、走り回る若者達の熱気。時限の一国二制度、その中で主権を求め続ける市民達の思いと危機感。日々、激化する摩擦と圧力にもかかわらず、何かが変わるのではないか、そのためにはどこまでも進みたい。そんな彼らの思いは痛いほど伝わってくる。一方、それを阻止しようとする警察官達の動き、警棒と鈍く光る催涙銃、両方を包むガスと鼻をつくにおい。圧力はますます強

まっているように見える。そんな半世紀前の情景がまざまざとよみがえってくる。そしてそれがどんな決着を見たか。香港の情況、予断を許さない。

参院選も一段落、関係諸方面のご努力の結果、少なくとも千葉県などで見る限り、一見、無風で終わったように見える。内閣改造は相変わらず派閥均衡優先で代わり映えしない。小泉政権、そして第二次安倍政権、結果としてこれまでにない長期政権が続いている。

だが昨今、国際情勢は激変し、国際関係は緊張を高めている。米中両大国の対立だけに止まらず、わが国周辺の多くの国が独自の動きを強めている。わが国にとっても、時代に即したしっかりした対応が必須だが、危機感はほとんど感じられない。かつてこの時代的課題を提起した民主党政権もあえなく自壊してしまった。

待ったなしの国際状況の激変にもかかわらず、なぜわが国の状況はかくも不気味なほどに静穏なのだろう？それがこれから始まろうとしている混沌の前夜でなければいいのだが。

今や、例えば着ているものはほとんどアジア製、秋刀魚一尾食べるにも遥か北洋の海に頼らねばならない。嵐が来れば、海外依存のエネルギー供給が断絶するような暮らしの状況である。

安定した国際情勢の中で、身の回りの国内事情に専念することのできた時代は過ぎた。国民のひとりとしてこの課題にどう取り組むべきなのか。今こそ国民主役の社会、国民本位の政治とは何か、改めて考えるべき時ではなからうか。

21世紀の市民として老母の介護や空家になっている実家の現状も気になるが、それ以上に、令和の今日、国民の誰にとっても、ゲオポリティクス ナウ ではないだろうか。